

二、明自利満足

(1) 如是菩薩

「如是菩薩 奢摩他毘婆舍那 広略修行 成就柔軟心」

ここに菩薩とあるは、発菩提心の人を総じて菩薩と名けられたものであつて、凡聖共に通じるのである。十住論一に云く、

「有但発心 亦名菩薩 何以故、若離初発心 則不成無上道 猶如比丘雖未得道 亦名道人」

初発心の人は菩薩ではない。しかし初発心の人を外にして別に菩薩は生まれない。それ故に、発心せる人も亦、菩薩と名けられるのであるとの説である。下に、大経の三輩の文を引いて釈せられるも亦この意である。この菩薩の言が、時には善男女(起観生信章。当修の機に約して云うなり)と言われ、この章には、菩薩(已修の機に約して)と云いて、二利成就せることを顯すのである。

善功撰化章已下に於いては、この「菩薩」が主題となつている。この「菩薩」について、先輩諸哲は、凡そ三説を出している。

① 願生行者を指す。

論の文の表面より見れば、この菩薩は、明らかに正しく、願生の行者の修行成就の因果を示されたものである。

② 法蔵菩薩を指す。

これ宗祖聖人が、二門偈に於て示されたもので、論の文に表われたる菩薩の五念門、即ち修道の因果は、そのまま法蔵菩薩の発心修行を説かれたるものとされたが故である。即ち法蔵菩薩は、礼拝、讚嘆、作願、觀察、回向の五念門によつて、自利他一如の正覚を成就せられたのであるとするのである。

③ 還相の菩薩を指す。

これは、ここに(証卷) 還相回向を説かれる下に、この文を引用せられたが故である。

以上の如き、同一の菩薩の文字の上に三義を見ることを如何に融會すべきであろうか。以上に於いて述ぶるが如く、同一の菩薩なる文字が、ある時は願生の行者ととられ、ある時は還相の菩薩と説かれ、ある時は法蔵菩薩と解せられることは、何故であるか。これ畢竟同一の文が、異なる意味を以て、各処に用いられたが為に他ならない。第一に、願生の行者と言う所以は、浄土論の文の当面は、徹頭徹尾、願生の行者たる天親菩薩が一心に如来に帰命しつつ、次第に、礼拝、讚嘆、作願、觀察、回向と、一心五念の相を展開しつつ、自利他成就する相を願生の歌として説かれたものであつた。されば菩薩とは願生の行者である。

次に、還相の菩薩とせられることは、宗祖が、それを教行信証の証卷において還相回向篇に、この文を引用せられたが為である。

憶うに、往還二相は、一は入門であり、一は出門であり、一は自利成就せんとするものであり、一は利他成就せんとするものであつて、往還もとより一に非ずと云うべきではある。

しかるに、還相の菩薩といえども、それはただ単に理想界に架空せられたる人ではなくて、我等の現実界に來たつて、一切衆生を導きつつ、衆生と共に安樂の國に願生する人である。されば、還相の菩薩といえども、具体的には願生の行者として、一心歸命、普共諸衆生、願生安樂國と、願生の一道を歩むより外にはないであろう。

宗祖聖人は、還相摂化の方便を、大聖はもちろん、七祖の上に、王舎城の諸縁の上に拝された。自らを引導して念仏の法門に入らしむる順逆二縁全ての上に、浄土より生死海への還相摂化の方便相を味われた。されば、往相位に立つて念仏する者が、我が前に立つて、我を導く現実の教主善知識の上に、還相の意味を拝むのである。我等が、往相回向の生活にありつつ、還相の徳を説ける教えの意味を領解することが出来るのは、我にせまる教主聖人の上に還相の徳を拝むことが出来るが故である。されば論註の文は、これらの人の内的生活を開顯せられたものともとることが出来るのである。されば、同一の文が、往相の行者ともとられ、還相の菩薩とも解せられる内面的交渉を知ることが出来るのである。

しかるに眼を一転して、菩薩の利他大悲の根本を求むれば、そこに法蔵菩薩を發見するのである。

止觀相順（後に説かれる）して五念門の行を修し、廣大なる三嚴二十九種の浄土を建立するものは法蔵菩薩である。この大慈悲によりて成就せられたる眞實報土より衆生救済の実現せられるもの、即ち回向である。還相の菩薩といえども、この大悲の本願より生起するものである。法蔵菩薩の因果なくしては、往還二回向の菩薩の全てはあり得ないのである。この意よりすれば、全文悉く法蔵菩薩の發心修行の因果を説けるものととられるのである。

されど、証卷還相回向に於いては、正しく還相の菩薩が、広略相入の浄土界中より、大悲心を以てこの生死界に還來して、衆生を利他教化する有様を示されたものである。即ち（一）止觀相順、広略相入は、菩薩の自内証を示し、（二）大悲回向は、その証より自然に發動する利他教化の願を示し（三）巧方便回向は、正しく衆生済度の相を示すものである。而してかかる巧方便回向は、上の第一第二の裏書をまっつて、初めて具体的にその意義を發揮するのである。

(2) 柔軟心の成就

「如是菩薩奢摩他毘婆舍那広略修行成就柔軟心」

この天親論主の語を釈して、曇鸞は、

「柔軟心者謂広略止觀相順修行成不二心也。譬如以水取影、清静相資而成就也。」
と言われる。

以上の文の意は、自利利他の利他、即ち還相の菩薩の善巧摂化は如何にして可能であるかを説かんとして、先ず柔軟心の成就を示されるのである。柔軟心とは、強梁又は強剛ならざる心である。さりとしてまた、柔弱又は懦弱ならぬ心である。前者は固くして弱き我慢の心であり、後者は弱くして力なき心である。柔軟心とは、強くして柔らかなる心である。

これを大經に見るに、彼の浄土の菩薩を説くに当たつて「身心柔軟無所味著乃至清淨安穩微妙快樂等と示し、如来本願中、第三十三願、觸光柔軟願には、

「設い我仏を得んに、十方無量不可思議の諸仏世界の衆生の類、我が光明を蒙りて其の身に触れん者身心柔軟にして人天に超過せん。若し爾ららずば正覺を取らじ。」

と誓われ、第十二願成就の文には、

「其れ衆生有りて斯の光に遇う者は、三垢消滅し、身意柔軟に、歡喜踊躍して善心生ず焉」

と説かれる。これによつて之を思うに、柔軟心は、現当二世、往還二相に通ずる巨益である。

しかるに今、善功摂化を説くに当たつて、論主は

「善功摂化とは、是の如きの菩薩、奢摩他、毘婆舍那、広略修行して、柔軟心を成就したまえり」と説き、鸞師は釈して

「柔軟心とは、謂く広略の止観相順し修行して、不二心を成ぜるなり。譬えば水を以て影を取るに、清と静と相資けて成就するが如し。」

と云う。先ず「広略止観相順修行成不二心」とは、広略とは浄土の広略相入を謂う。浄土の広略とは、三種莊嚴二十九種をさし、略相とは一法句、一法句とは清浄句、清浄句とは眞実智慧、無為法身のこと。この眞実智慧無為法身によつて、浄土の広大な莊嚴を生じ、広大な莊嚴によつて、清浄功德を出すのである。略相によつて広相あり、広相によつて略相に入る。これを広略相入と云うのである。されば浄土は広略相入の境である。

3

「柔軟心とは、謂く広略の止観相順し修行して不二心を成ぜるなり。」

次に止観とは、止(奢摩他の訳)とは定であり、観(毘婆舍那の訳)とは止定によつておこる観慧である。即ち心を一境に止むるは止であり、それによつて浄土の広略相入を觀ずるは觀である。されば、浄土の広略相入を觀ずるものは觀である。しかし觀を成就するものは、心の波をとどむる止である。故に止観相依つて、浄土の広略相入を知るのである。

かくの如く、止観互いに相資け相順して、広略相入する心を不二心と云うのである。止観は誠に不二心である。されば不二心は、広略相入し、止観相順して境智不二、能所融合泯亡する心であり、これを柔軟心と云うのである。されば若し広に執して略を失い、略に偏して広を知らずば不二心ではない。止観も亦然り、定慧相資けて彼の広略の如く、如実に知見し、柔軟に調和するを柔軟心と云うのである。止観不二心は、誠に法の実相に契う心である。されば浄土は広略不二の境であり、止観は広略相入する心なるが故に、止観は浄土の心である。随つて柔軟心は浄土の心である。柔軟心は、浄土の眞実相を止観の行によつて觀察することによつて成就するのである。浄土の広略相入なくして如実の觀はないし、觀なくしては止も成就しない。止が成就しなれば觀なく、觀なければ広略相入を知らない。かく順逆いづれより云うも、止観不二の心によつて柔軟心を成就すると云うことは、浄土の広略相入の徳こそ、止観を成就し柔軟心を生ずることが出来るのである。されば論の文には「如実知広略諸法」と云い、鸞師は註釈して、

「実相の如くして知るなり。広中の二十九句と、略中の一句と、実相に非ざることなきなり。」と説かれる。浄土の広相二十九種も、略相一句も、実相に非ざることなきが故に、その実相の如く知って浄土に違逆せざる心、即ち柔軟心である。

実相とは「相即ち無相」なるを名けて実相と云う。広略相入に達すれば、即ち実相の如く知ると言われる。三種莊嚴の実相は法性であつて、相好莊嚴即ち法身であるが故に、広も単広に非ず、略も亦単略に非ず、故に「莫^レ非^ニル^{コト}実相^一」と云う。しかし実相と云う限り、広より略に入り、相より無相に達するにあり、これは特に般若実相の智に約して云うのである。浄土の莊嚴二十九相に入つて、いよいよ無相を知る、これ実相の如く知るのである。其処に柔軟心が成就する。

「柔軟心とは、謂く広略の止観相順し修行して不二心を成ぜるなり。」

前に於て、浄土の菩薩が、柔軟心を成就するに當つて「広略の止観相順して」修行し不二心を得ることを説いた。然しながら初学者の便宜を思い、広略相入等の言について、わかり易く重ねて説くであろう。

広略相入とは、浄土には二種の相がある。二種の相とは、広相と略相とである。広相とは、浄土の莊嚴仏土功德成就十七種と、莊嚴仏功德成就八種と、莊嚴菩薩功德成就四種と、この三種莊嚴二十九種を広相と云うのである。天親論主は、浄入願心章において「この三種莊嚴は、願心をもて莊嚴したまへり、応に知るべし。」と説かれ、鸞師は註解して「応に知るべしとは、この三種の莊嚴成就は、本四十八願等の清淨願心の莊嚴せる所なるに由りて、因淨なるが故に果淨なり、因無くして他の因有るには非ずと知る応しとなり」と言われた。

この註家の意によつて論主の意をうかがえば、浄土の広大なる莊嚴は、但単に美しき世界ではなくて、特に願心莊嚴の世界であることを示されたのである。願心莊嚴の世界とは、浄土の三嚴は本法藏菩薩の四十八願等の清淨願心の莊嚴せられたる世界であるとの意である。即ち弥陀の浄土は「報土」たることを示されたのである。願心莊嚴の世界とは、報土である。憶うに、凡夫は生死海をその生活対象とし、二乗は灰身滅智の實際を証して、何等の活動を持たず、自力の行者は、化土に入り、而して菩薩の生活は、報土をその生活対象とする。報土に化生することは、菩薩の無限の光榮である。報土は清淨願心の莊嚴せる世界である。而して、願心即ち四十八願は、一一誓願為衆生故としてその全てが衆生において必然の交渉を持つ、若不生者不取正覚の願の具体化された世界である。衆生を救わずばおかぬとの大悲方便、利他成就より外に何等の意味なき世界が報土である。願は衆生の苦惱なくしては生まれないのである。しかるに願心莊嚴の世界、即ち報土は、「因淨なるが故に果淨なり。」清淨なる因果、即ち本願のままに成就せられたる如来正覚の依報である処の世界である。「因無くして他の因の有るには非ずと知る応し。」願心莊嚴の世界にして、無因でもなく他因でもない。唯一願心に酬いて顕現する世界である。これ「清淨願心の莊嚴せる所」と言われる所以である。

しかるに以上の如く浄土を願心莊嚴の世界と領解することによつて「願心莊嚴」の意味はわかつたが、「清淨願心の莊嚴」とある清淨の意は何を示すのであろうか。「因淨なるが故に果淨なり」とある淨とは何故であらうか。論及び註に曰く

〔論に〕略して入一法句を説くが故に、とのたまえり。上の国土の莊嚴十七句と、如来の莊嚴八句と、菩薩の莊嚴四句とを「広」と為す。入一法句は「略」となす。何が故ぞ広略相入を示現すとならば、諸仏菩薩に二種の法身有り、一には法性法身、二には方便法身なり、法性法身に由りて方便法身をせず、方便法身に由りて法性法身を出す、この二法身は、異にして分つ可からず、一にして同ずべからず。是の故に広略相入して、統ぬるに法の名を以てす。菩薩若し広略相入を知らずんば、則ち自利利他すること能わず、〔論に〕『一法句とは、謂く清浄句なり、清浄句は、眞実智慧、無為法身なるが故に』とのたまえり。」

以上の説は、浄土がいわゆる「広略相入の世界」たることを示されたものである。先ず一法句とは、何であるかと云うことについて、六要には「一法の二字に所詮の法体、句の一時は能詮の名字なり」とする。しかるにこの一法句の釈について古来甚だ多くの説がある。これを、眞如の理とするもの、眞如を照らす般若の智とするもの、あるいは、名号又は覺体の事とするもの等と別れるようである。安芸の慧雲師は、一法句を以て「一法句は不二法門の謂なり、理事不二、悲智不二なり。」と云い、不二の故に一である、法門の門は句の義であるとし、この旨に達すれば、一法句を理とするも亦得たり、事となすも亦得たりと云つてゐる。この説を最も勝れたりとすべきであると思う。慧雲師の言の如く、あくまで理事不二、悲智不二の上に立つて、玄一の小經疏の説の如く、「眞如一理の句なるが故に一法句と云う」と云うも亦可とすべきであろう。已下、眞如の理を一法句となすとしておく。

浄土の三嚴二十九種は、所謂広相の浄土である。この三種莊嚴の広相は、この一法句の略相に入るのである。これを入一法句と言われるのである。一法を開けば無量の莊嚴となるを広と名け、諸相を摂して一法に入るを略とするのである。広は徳の相であり、略は徳の体である。これを広略相入と云うのである。

これを更に詳説せんとして鸞師は、「諸仏菩薩に二種の法身有り、一には法性法身、二には方便法身なり、法性法身に由りて方便法身をせず、方便法身によりて法性法身を出す、この二の法身は異にして分つべからず、一にして同ずべからず、是の故に統ぬるに法の名を以てす。菩薩若し広略相入を知らずんば、則ち自利利他すること能わず」と示される。法性法身は、略、方便法身は広である。法性法身に由りて方便法身を生じ、方便法身の徳相によつて、法性法身の体徳を顕現するのである。法性法身とは、法性とは眞如の理、法身とは智、法性を証するの法身を法性法身と云う。又、能詮所詮は境智不二であるから法性即ち法身とも云える。方便法身とは、自利を全うする利他を方便と云い、形を現し名を示して能く衆生を撰取するを云うのである。この二身は、二にして一、一にして二である。般若の絶対智によつて得るものが法身であり、この法身によつて大悲方便をおこすのが方便法身である。大悲方便を全うすることなき法身はあり得ないし、法身なくしては方便法身も出ては来ない。方便法身の世界は、三種莊嚴の広相であり、法性法身は、形色を超えたる無相である。而して略相たる法性法身の徳は、広相たる方便法身の上に具現され、広相は顕現すればするだけ、略相に融入摂入するのである。これを広略相入と云うのである。されば「菩薩若し広略相入を知らずんば、則ち自利利他する能わず」の言も知らるるのである。

「柔軟心とは、謂く広略の止観相順し修行して不二心を成ずるなり。」かく浄土の広略相入の徳を止観不二心によつて得るもの即ち、菩薩の柔軟心である。されば柔軟心こそは、浄土の広略相入の徳によつてのみ得る所の心である。柔軟心は、智慧である。広略の諸法を照見する般若の智慧である。これなくして自利利他することは不可能である。

「譬如以水取影清静相資成就」

広略の止観相順して不二心を成ずる相を譬によつて表現せられるのである。水とは、能縁の心に喩え、取影とは、境の現ずるに喩え、清とは清澄で観に喩え、静とは、寂静で止の波乱の動くことなきに喩えられたものである。水よく清澄にして、寂静なれば、影は自らその中に現ずるが如く、清澄なる観と、寂静なる止と相資することによつて、観心明かなれば、浄土の広略の境相が自ら現ずるであろう。清水も若し動けば、影は現れず、濁水は静なるも影を取るに術なき如く、定を得るも観慧なくば定も意味をなさず、観慧を得んとするも、諸惑心を乱して能く智慧を障^さえるならば、境を現ずることは不可能である。止観相順することは、清浄相資けるが如しである。されば「水を以て影を取るに清と静と相資けて成就するが如し」と云うのである。かくして柔軟心において境と智と冥合して不二心を成就し、観心の水を以て所観の境を取るに、止観の清静相資けて、所観の境現前し、不二心を成ずるを、相資成就と云うのである。柔軟心の成就をおわる。